

中国出張報告

宮原 佳昭

出張先：中国

期間：2011年12月22日～30日

私は上記の期間中、アジア・太平洋研究センターの研究支援を受け、江蘇省呉江市を訪れ、蘆墟鎮を拠点に、太湖流域の農村・漁村での聞き取り調査に従事した。これは、太田出（広島大学准教授）・佐藤仁史（一橋大学准教授）両氏が2004年より継続している調査に同行し、聞き取り調査のノウハウを学ぶことを主目的とするものである。

太田・佐藤両氏は、近現代の太湖流域社会の実態を解明することを研究目的として、これまで民間信仰・土地行政・漁民などのテーマで精力的にフィールドワークを展開し、すでに多くの業績を挙げている。このたび私が両氏の調査に同行するのは、同地域における教育の実態を研究するという、新たなプロジェクトへの参加を志願してのことである。

私自身について言えば、これまで文献史料を中心として中国近代教育史の研究を進めてきたもので、聞き取り調査については全くの素人である。私が両氏の調査に初めて参加したのは2010年8月で、今回は2回目にあたる。そのため、先述のとおり、聞き取り調査の経験を積み重ねて、両氏より聞き取り調査のノウハウを学ぶことが、出張の主目的となる次第である。

今回の出張により、両氏の聞き取り調査のノウハウに関するより深い理解を得ることができた。以下、私が理解したところを書き記すことにしたい。

- ・インフォーマントの選定は、現地協力者や他のインフォーマントの紹介など、個人の人脈を通じたいわゆる「芋づる式」による。
- ・インフォーマントには最大限の敬意を払う。訪問の際には、事前に手みやげ（果物・タバコなど）を購入・持参するなど、誠意を欠かさない。
- ・聞き取り初回のインフォーマントに対しては、まず出身・家族構成や来歴など、彼の経歴の全体像を確認する。最初から個別具体的な質問をすることは厳禁である。
- ・一回の聞き取りですべてを聞こうとするのではなく、複数回の訪問を前提とする。複数回訪れることで双方の理解を深め、信頼関係を構築し、結果として聞き取り内容もより深くなる。
- ・聞き取りは基本的に、現地語を解する通訳を介しておこなう。

- ・聞き取りの際、当方でメインの聞き手を一人設定し、彼が中心になって質問をする。他の聞き手はサブとして、メインの聞き手の合間に、補足として質問する。
- ・通訳は一つの質問ごとに、聞き取った内容を普通話でノートに書き取る。聞き手は通訳のノートを見ながら自分のノートにも書き写す。聞き手が書き終えた後、次の質問にうつる。
- ・聞き取りは、インフォーマントの了承を得たうえで録音をする。録音内容は、後日ネイティブに文字起こしを依頼する。当然のことながら、文字起こしした内容の確認や公開についても、すべてインフォーマントの了承を得る。
- ・1回あたりの聞き取り時間は2時間程度、長くても3時間以内とする。これは、インフォーマントが基本的に高齢であることから、長時間の聞き取りによる疲労・倦怠を防ぐためである。
- ・上記にともない、1日あたりの調査回数は午前1回、午後1回を基本とする。

今回の調査において、インフォーマントの選定や行程などは、みな太田・佐藤両氏の段取りによるものである。行程では、多くは太田氏と佐藤氏の2チームに分かれ、私は佐藤氏のチームに同行し、サブの聞き手として10回余にわたって聞き取りに参加した。

インフォーマントは香頭・旧地主・小学校教員経験者などで、みな70歳代以上、多くはすでに両氏が2004年以降何度も訪問し、すでに信頼関係を構築している。聞き取り内容は、中華人民共和国の建国、いわゆる解放前後から現代にかけての民間信仰・土地行政・教育に関するものである。今回は以前の聞き取りの補充という側面が大きく、メインの佐藤氏による質問はその多くが個別具体的なものであった。私がサブとして質問したもので、とくに教育に関するものを挙げると、たとえば解放前の教育として農村では私塾が存在し、実際に私塾に通って儒教經典の暗誦を行っていたという、文献史料の記載を実体験として聞き取れたことは極めて印象深いものである。また、蘇州市では、解放後より長らく小学校教職員を務めた人物に対して初回の聞き取りをおこない、解放後の小学校教員の来歴に関する具体像を得られたのは、今後につながる大きな成果である。

最後に、今後も引き続き調査に参加するにあたり、今回の反省点と今後の課題を挙げたい。まずは太湖流域社会に対する理解の不足である。事前に太田・佐藤両氏より予備知識を学び、また私自身も研究書で勉強したものの、いまだ十分に咀嚼できていないところがおもも多い。今後、先行研究や地方志などを通じて太湖流域社会に関する理解を深めることが、何よりの課題である。これに関連して、太湖流域社会における教育をいかに分析するか、聞き取り調査を積み重ねることによって研究テーマをさらに深めていくことが必要である。また、中国語運用能力に関しても、現地方言はと

もかくとして、普通話の運用能力を一層高めなければならない。